

個 体 群 生 態 学 会 会 報

No. 73

2016 年 8 月

ご挨拶	会長 椿 宜高	i
2017 年度「個体群生態学会奨励賞」候補者募集	会長 椿 宜高	1
第 32 回個体群生態学会大会開催のお知らせ (2016 年 11 月 3 日～5 日)齊藤 隆	2
第 31 回個体群生態学会大会 (彦根大会) 開催報告 (2015 年 10 月 10 日～12 日)西田隆義	5
研究室紹介		
九州大学農学研究院天敵昆虫学研究室.....	菅原有真・福田一人	12
九州大学理学研究院(ゲノム)生態科学研究室.....	佐竹暁子・細川貴弘	16
事務局報告	内海俊介	24
Population Ecology 編集報告	佐藤一憲	27
会員異動		30
編集後記	津田みどり	32

個体群生態学会

ご挨拶
会長 椿 宜高

今年度から、齊藤さんの後を受けて、会長を務めさせていただいています。個体群生態学会は2014年3月26日に特定非営利活動法人として京都市に認証、京都地方法務局に登録されました。嶋田前々会長がNPO法人化へのロードマップを描き、齊藤前会長によって法人化が実現されました。正式な呼称は「特定非営利活動法人個体群生態学会」です。2015年度は移行措置として、任意団体としての個体群生態学会とNPO法人としての個体群生態学会が並存していましたが、2015年10月11日における総会（滋賀県立大学）で任意団体としての個体群生態学会は解散となり、完全にNPO法人に移行しました。そのあとを私が引き継ぎ、法人の運用を開始することになります。以前に比べ、税務署等への事業報告の義務が生じ、学会事務局の負担は増えますが、学会のコンプライアンス（法令遵守）を公に示す手段として、避けられない移行であるとの判断です（詳しくは嶋田2012）。とは言っても、何を研究の対象にすべきか、あるいはその方法論への圧力が加わるような変化ではありませんので、これまでの学会の本質が変わってしまう心配はありません。しかし、制度上の細部の違いは、理事会もまだ完全に理解していない状況です。その違いが十分わかるまで、手続き上の細かい間違いをいくつか犯しそうな気がします。しばらくの間、温かい目でよろしくお願いします。専務理事（旧称は事務長）は石原道博さん（大阪市立大学）にお願いしています。編集長は前年度に引き続き佐藤一憲さん（静岡大学）にお願いしていますが、来年度は野田隆史さん（北海道大学）に交代の予定です。ホームページ担当は引き続き岸田治さん（北海道大学）にお願いしています。

思い返すと、私が個体群生態学会と関わりを持ったのは、1971年に開催された高知シンポジウムでした。40年以上前のことです。当時、私は九州大学修士の学生。当時まだ助教授だった小野勇一先生（昨年亡くなられました）や先輩たちから個体群シンポジウムという合宿形式の研究会があることを知りました。当時高知農試におられた桐谷圭二、中筋房夫、笹波隆文先生達のお世話で企画され、ツマグロヨコバイなど農業害虫の個体数変動と総合防除がテーマだったと記憶しています。発表や議論の内容は、修士学生にとっては難しくてチンプンカンプンでしたが、最新の研究情報、先輩研究者たちの熱気と情熱は十分感じる事ができたと思います。それ以来、2年に1度企画されるシンポジウムにはほとんど参加し、大いに刺激を受けて勉強させてもらいました。

最近の個体群生態学会大会は毎年開催で、普通の学会形式に変わっています。若い人たちには、隔年開催の合宿シンポジウムはすで伝説化しているかもしれません。しかし、今年の北海道での大会は、齊藤さんたちの尽力で合宿形式の学会大会が行われる予定になっています。詳しくは本号の大会案内をご覧ください。きっと、素晴らしい会になると思いますので、お楽しみに。

個体群生態学会を囲む社会環境も研究環境も刻々と変化しています。それにつれて学会も姿を変えてきました。過去最大の変化は先に挙げたNPO法人化だろうと思います。法人化は総合的にはプラスでしょうが、予想外の影響が今後次第に見えてくることでしょう。これまでも、個体群生態学会は立ちはだかる問題の解決に向けて様々な改革を行ってきました。一つは、隔年の合宿シンポジウムから

毎年の学会形式への変化です。もう記憶が薄れてしまいましたが、総会を毎年定期的に行えるかどうかが学会の評価に関わるとの判断だったように思います。

雑誌発行についてもいろいろな試みがありました。私は1989年から1991年まで編集長を務めさせていただきましたが、その頃は“Researches on Population Ecology”を年2回発行していました。日本の生態学分野ではほとんど唯一の英語雑誌として、高いレベルの論文を掲載していたのですが、その頃から色々な問題を抱えていました。雑誌名に違和感がある、年2号では発表までの時間がかかりすぎる、投稿論文数の確保に苦勞する、などなど。しかし、研究者がこれらの編集に関する課題を解決するには、負担が大きすぎることも明らかでした。雑誌改革は藤崎編集長の時期(1993)から始められ、大串、曾田、齊藤各編集長へと引き継がれていきました。その経過と成果は藤崎(1994, 2003)、齊藤(2003, 2013)、曾田(2003)によって会報に掲載されています。Springer出版委託(1999)、年3号化(1998)から年4号化(2006)、雑誌名変更(2000)、ウェブ投稿開始(2006)など、時代に合わせて次々と改革を進めてきました。その成果は次第に上がってきています。

ここで若い学会メンバーに向けてのメッセージ。個体群生態学会のメンバーで得することは少なくとも2つあります。ひとつは研究集会に参加する時の充実感、もうひとつは雑誌の国際性とレベルの高さです。しかし、研究集会も雑誌も、学会から受動的に受け取るだけではもったいない。自分が研究集会の企画に加わることで、世界は変わって見えるようになります。また、論文を投稿し、レフェリーから散々なコメントをもらうことで、打たれ強くなれます。この学会では先輩への発言に遠慮することはありません。ぜひとも、積極的に学会の企画に参加し、なりふり構わず自我を出してください。大きくなった先輩たちが皆通った道です。この学会が発展を続けることができるかどうかは、いかに若い人材を理事会に取り込み、意見をまとめていくかにかかっています。個体群生態学会をもっともっと有益な会にするよう、皆で工夫していきましょう。

引用文献

- 嶋田正和(2012) 個体群生態学会のNPO法人化に向けてのロードマップ. 個体群生態学会会報69: 2-8.
- 齊藤隆(2013) ごあいさつ. 個体群生態学会会報70:2-3.
- 藤崎憲治(1994) 個体群生態学会の新たな展開に向けて 雑誌改革と会員の意見. 個体群生態学会会報51:85-101.
- 藤崎憲治(2003) 雑誌改革に至った経緯と改革案の骨子. 個体群生態学会会報60:6-9.
- 齊藤隆(2003) データでたどる雑誌改革. 個体群生態学会会報60:18-28.
- 曾田貞滋(2003) *Population Ecology* 今後の編集方針. 個体群生態学会会報60:18-28.

2017年度「個体群生態学会奨励賞」候補者募集

「個体群生態学会奨励賞」は、個体群生態学の一層の発展を図ることを目的として、個体群生態学の優れた業績を挙げた国内外の若手研究者を表彰するものです。本学会員、もしくは、Population Ecology (あるいは Researches on Population Ecology) に論文を掲載したことのある者を対象とし、自薦による応募者もしくは会員から推薦された者の中から、毎年1名の受賞者を選考して賞状が贈呈されます。受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、ふるってご応募・ご推薦いただきますようお願いいたします。

2016年7月1日

個体群生態学会会長

椿 宜高

記

1. 受賞候補者の条件：個体群生態学会の若手会員、もしくは Population Ecology (Researches on Population Ecology) に論文を掲載したことのある若手研究者
2. 応募書類：(1) 候補者の氏名・所属・連絡先、(2) 略歴(他薦の場合はわかる範囲で記入)、(3) 業績リスト(主な業績5件までに○印を記入)、(4) 推薦の理由(A4用紙1枚以内)。ただし、選考委員会から追加資料を問い合わせることがあります。
3. 送付先：Emailか郵便でお送りください。Emailの件名か郵便封筒の表に、「個体群生態学会奨励賞応募書類」と記入してください。受領確認の連絡がない場合は問合せください。
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1番1号
大阪府立大学大学院理学系研究科生物科学専攻
個体群生態学会専務理事 石原道博
(email: mishiha@b.s.osakafu-u.ac.jp)
4. 締切：2017年3月31日(必着)

以上

第32回個体群生態学会大会開催のお知らせ

齊藤 隆 (実行委員長)

個体群生態学会は第32回大会を2016年11月3日から5日の昼までの日程で、札幌市の定山溪温泉 鹿の湯で開催します。9年ぶりの合宿シンポです。ディープな個体群生態学の世界を堪能いただけると思います。基調シンポジウムは、"**Evolutionary Demography Society**" (<http://www.evodemos.org>) で活躍しているメンバーを中心にしたものです。一般講演としてポスター発表の公募ももちろん行いますので、ぜひ参加ください。

日時：2016年 11月 3日 (木, 文化の日) ~ 5日 (土)

会場：札幌市 定山溪温泉 鹿の湯

〒 061-2303札幌市南区定山溪温泉西3丁目32

大会ウェブページ：<http://populecol32.jimdo.com/>

大会参加費・懇親会費

参加費 (運営費 + 2泊, 4食 (懇親会を含む) の代金)

会員 一般：28,000円 学生：18,000円

非会員 一般：36,000円 学生：22,000円

合宿に参加しない「通い」の参加費は一律 5,000円

参加申し込み受付

参加申し込みは大会ウェブページで、8月初旬から受け付けます。申し込み締切は **2016年9月15日** です。

参加費・懇親会費振込

参加費・懇親会費の支払いには以下の郵便振替口座をお使いください。

口座名：特定非営利活動法人 個体群生態学会

(トクテイヒエイリカツドウホウジン コタイグンセイタイガツカイ)

口座番号：**00950-6-97521**

他金融機関からの振込用口座番号

○九九 (ゼロキユウキユウ) 店 当座 0097521

※上記参加費・懇親会費と異なる金額を振り込まれる場合と「通いの参加費」を振り込まれる場合は **必ず内訳を通信欄に明記して下さい。** (ない場合は会費との区別が難しくなります。)

大会日程 (予定)

11月3日 (木) 文化の日

13:00-17:30 理事会など

15:00-17:45 受付・ポスター貼り付け

16:00-17:45 自由集会

18:00-19:00 夕食

19:00-21:00 ポスターセッション

21:00-23:30 懇談会 (ビール, つまみなどを用意します。ご自慢の銘酒などの持ち込みを歓迎します。)

11月4日(金)

8:30-11:30 基調シンポジウム

昼食

12:30-15:00 公募シンポ-1

15:00-16:00 ポスターセッション

16:15-17:00 奨励賞受賞講演

17:00-18:00 学会総会

19:00-21:00 懇親会

21:00-23:30 懇談会(ビール, つまみなどを用意します. ご自慢の銘酒などの持ち込みを歓迎します.)

11月5日(土)

8:30-11:30 公募シンポ-2

昼食 解散

基調シンポジウム: Evolutionary demography: the dynamic and broad intersection of ecology and evolution

企画者: 高田壮則(北大・地球環境)、Richard Shefferson (東大・教養)

Demography という英単語はよく「人口統計学」と訳されますが、生物学では一般の生物集団の統計データを扱う学問を指す言葉として使われます。ですから、このシンポジウムタイトル、"Evolutionary demography"、は日本語に訳しにくいものですが、あえて表現すると、「生活史パラメーターの進化的説明を試みる学問」となるのでしょうか。生態学の文脈では集団動態のパラメーターとみなされていた生物集団統計が、進化学の文脈ではどのように解釈されるのか? 生物集団統計が多数種、多年にわたり集積されると生物のどのような姿が見えてくるのか? このシンポジウムでは、Evolutionary demography の潮流を紹介するために、動植物、人間の生物集団統計を扱った最新の理論・応用研究を紹介します。

Speakers:

Tak Takada (Hokkaido University, Japan)

Roberto Salguero-Gómez (University of Queensland, Australia)

Masahito Morita (Sokendai, Japan)

Richard Shefferson (University of Tokyo, Japan)

Shripad Tuljapurkar (Stanford University, USA)

企画シンポジウムの企画募集のお知らせ

下記要領でシンポジウム企画を公募します。2件ほどを選定する予定です。

シンポジウム企画募集要項

1. 応募資格：企画者が個体群生態学会会員であること。応募時点で入会意思を確認できれば可。
2. テーマ：個体群生態学に広く関わる課題を受け付ける。個体群生態学の概念を拡張するような企画を歓迎する。
3. 時間枠：2時間30分から3時間。演題数、各発表の長さには制限はない。発表時間が異なってもかまわない。
4. 発表言語：英語の使用を歓迎しますが、日本語使用の企画も受け付けます。
5. 締め切り：2016年7月29日（金）
6. 応募方法：下記事項を明記の上、E-mailで <tsaitoh@fsc.hokudai.ac.jp> に送付。
 - 1) シンポジウムタイトル（英文・日本語どちらか）
 - 2) オーガナイザーの氏名、所属、連絡先
 - 3) 概要（英文半角400文字程度あるいは和文全角200文字程度）
 - 4) 予定する指定演者の氏名・所属（応募時には演者による講演承諾は不要）
7. 予定採択数：2題
8. 参考：採択された企画はシンポジウム開催後、"*Population Ecology*" の特集として掲載されることもあります。

一般講演（ポスター発表）・参加の申し込み

一般講演（ポスター発表）の申し込みは、大会ウェブサイトをよく読んで、要領に従って申し込んで下さい。締切は **2016年9月15日（木）**、要旨締切は **10月18日（火）** を予定しています。

サテライト企画「若手の学校『個体群生態学理論の基礎から応用まで』」

基調シンポジウムの内容をより深く理解していただくために「若手」（特に定義しない）を対象にセミナーを開きます。企画の詳細はおって大会ウェブサイトでお伝えします。

日程：年11月2日（水）-11月3日（木）

会場：北海道大学内

聴講者数：上限 25名

第32回大会実行委員会

齊藤 隆（北海道大学、委員長）、高田壮則（北海道大学）、岸田治（北海道大学）、内海俊介（北海道大学）、荒木仁志（北海道大学）、野田隆史（北海道大学）、西村欣也（北海道大学）、奥崎穰（北海道大学）

最新の情報は、大会ウェブサイトをごらんください。

第 31 回個体群生態学会大会 開催報告

西田隆義

第 31 回個体群生態学会大会は、2015 年 10 月 10 日から 12 日までの日程で、滋賀県立大学の交流センターと湖風会館において開催された。初日には、これからの 30 年:生態学の大問題は何か? と題する討論会が行われ、長期的な観点からこれまでの個体群生態学を振り返り、将来が展望された。多様な議論が噴出し、改めて生態学という学問の持つ多様性と多面性が現れると同時に、統一を志向する動きも感じられた。

大会基調シンポジウムとして A: Sex in the community: Reproductive interference and its implications と B: Biogeography: Spatial partitioning of diversifying lineages の 2 件を開いた。シンポジウム A は、鈴木紀之氏 (立正大)・京極大助氏 (京都大) が企画者で、鳥、昆虫、植物など幅広い系統群を対象とした、繁殖干渉の実証・理論研究と概念的整理などが行われ、現時点での研究の到達点と課題について議論があった。David Wheatcroft 氏 (ウプサラ大学) はキビタキ属の近縁な 2 種において、繁殖隔離にかかわるオスの鳴き声とそれに対するメスの選好性について、学習プロセスと遺伝的要因に関連させて詳細に調べた結果について述べた。Magne Friberg 氏 (ウプサラ大学) は、ヒメシロチョウ属の姉妹種群のニッチ分化について調べ、2 種が共存する地域では、両種が相補的に生息場所ジェネラリストと生息場所スペシャリストになり、この関係がモザイク状に分布することを示した。このニッチ分化には、交尾を伴わない求愛ハラスメントが関わっており、いずれの種がその地域に先着したがニッチ分化の方向を決めることが示唆された。山口諒氏 (九州大) は、メスのオスに対する好み繁殖についての形質置換をもたらすことを理論的に研究した成果について報告した。繁殖干渉が存在する場合であっても、メスが繁殖干渉を避けるように自種オスに対する選好性を進化させる

ことで、生殖前隔離が生じる場合があること、さらに繁殖干渉が側所的種分化を促すことが示された。これらの発表を受けて、京極大助氏は、絶滅、繁殖形質置換、生息場所分化など繁殖干渉をもたらすさまざまな帰結が、どのような機構に基づいて決まるのかについて、進化的救助の概念に基づいて議論を整理し、今後の研究の展望について考察した。最後に、発表を受けて鈴木俊貴氏 (総研大)・鈴木紀之氏・香川幸太郎氏 (東大)・笠田実 (東大) の 4 名のコメンテーターが、多様な側面から議論を行った。

翌日 11 日の基調シンポジウム B は、西田が企画した Biogeography: Spatial Partitioning of Diversifying Lineages であった。最初に西田が、鍵となる生物間相互作用、とりわけ繁殖干渉と侵入の順序を取り入れた生態学に基づく生物地理学を再興することについて述べた。特に、侵入の順序が強い履歴効果を産むことで、これまで説明が困難だった分布パターンがうまく説明できる可能性が指摘された。続いて高倉耕一氏 (滋賀県立大) が、瀬戸内海に浮かぶ約 60 の島々において在来雑草と近縁な外来雑草の駆逐パターンを調べた結果について述べた。駆逐は、種間送粉が結実にもたらす非対象的な効果によってうまく説明できることと、在来種が劣悪な石垣環境でうまく繁殖できるように花の形態などを適応的に進化させたことで、ほそぼそと存続していることが分かった。侵入時期が異なる島の生物地理学をいわばタイムマシンとして利用することで、異なる駆逐過程をリアルタイムに観察することが可能になり、これが生態学の仮説検証のために有力な手段を提供することが強く示唆された。秋元信一氏 (北大) は、分岐途上にあると考えられるサッポロフキバツタ群において、繁殖形質が地理的に大きな分化を遂げていること、特にメスのオスに対する拒否行動には著しい地理的変異があり、メス

の拒否活性とオスの交尾活性の間には正の関連があることが示された。しかし、交尾の拒否活性の低い集団では、交尾後に他集団オスの精子を排出するなど、隠蔽的な生殖隔離の発達もみられるなど、繁殖形質の地理変異は複雑なパターンを示すことが明らかとなった。辻和希氏（琉球大）は、アリの侵入をめぐるこれまでの研究を振り返り、アリの生活史が特殊であることが、生態学と進化学の基本理論との関連をあいまいにしてきたことを指摘した。そして、従来となえられてきた“passenger hypothesis”（人間活動により在来種が侵入するという仮説）や“backseat hypothesis”（攪乱地に侵入した外来種が在来種をさらに駆逐するという仮説）が、それぞれ高い内的自然増加率と非平衡群集説など基本理論によって説明可能なことを述べた上で、この2つの機構を識別する方法を提案し、アリ群集について適用した結果について報告した。最後に、Evan Economo 氏（沖縄科学技術大学院大）が、アリの地球規模での膨大な分布データベースを統合して解析することにより、種多様性のホットスポットが判明し、多様性がどのようなクラインを示すのかが特定された。種多様性は緯度にそった急激なクラインを示すものの、種分化率には緯度の効果はほとんどないこと、温帯の系統群は熱帯のクレードの中に入れ子になっていること、温帯における分化は寒冷期とともに進むことなど

が示された。これらの結果により、分化率ではなく、分化の起きた時期が、種多様性の強い緯度クラインの原因であることが示唆された。

公募による企画シンポジウムとして、カワウ個体群管理の未来（企画責任者・松田裕之氏・横浜国立大）、包括適応度理論の展開：種内関係から種間関係を見据える（企画責任者・土畑重人氏・京大；入谷亮介氏・九大）、これからのミバエ生態学（企画責任者・鶴井香織・琉球大；本間淳・沖縄防技セ/琉球産経/琉球大）の3つが開催された。それぞれ個体群管理、基礎理論、害虫防除という個体群生態学の異なる3分野に関わるユニークなシンポジウムであり、活発な議論が行われた。ポスター発表は、本大会でも43題と盛況だった。

財政面では、シュプリンガーから20万円、滋賀県立大学から10万円の補助をいただき、それぞれ招待講演者の旅費・宿泊費の一部やアルバイト代などに充当することができた。こうした支援のおかげで、大会収支は赤字をださずにすんだ。

大会会長を引き受けていただいた沢田裕一氏、会計・Web担当の高倉耕一氏、基調講演担当の鈴木紀之氏・京極大助氏、大会運営や懇親会について手伝ってもらった滋賀県立大学の院生・学生諸氏、大会会場と機器の使用について便宜をいただいた滋賀県立大学、および後援していただいた彦根市に深く感謝します。

■会期：2015年10月10日（金）～10月12日（日）

■会場：滋賀県立大学交流センター・湖風会館

■大会実行委員会：沢田裕一（大会会長）・西田隆義（実行委員長）・高倉耕一・京極大助・鈴木紀之

■参加者内訳（アルバイト学生・学部生を含む）

大会参加：110名

ポスター発表：43件

懇親会：88名

■ポスター賞

最優秀ポスター賞

・森林の群集遺伝学：昆虫群集の年変異は樹木の遺伝変異で説明できるか？

鍵谷進乃介（北大・院・環境科学）・内海俊介（北大FSC）

優秀ポスター賞

- Sex difference in random walk patterns enhances mating encounters
水元惟暁 (京大院・農・昆虫生態)・土畑 重人 (京大院・農・昆虫生態)

■秋のエコカフェ これからの 30 年：生態学の大問題は何か？ 10 月 10 日 (土)

- 生態学の過去 30 年：何を問うてきたのか 西田隆義 (滋賀県立大)
- 生物学のなかの生態学 細 将貴 (京都大学白眉センター)

■基調シンポジウム A

Sex in the Community: Reproductive Interference and its Implications

Organizer: Suzuki Noriyuki (Rissho Univ.) & Daisuke Kyogoku (Kyoto Univ.)

- Asymmetry in species recognition and reproductive interactions in a hybridizing avian species pair
David Wheatcroft (Department of Ecology and Genetics, Uppsala University)
- The evolutionary ecology of niche separation in *Leptidea* butterflies
Magne Friberg (Uppsala University), Vlad Dinca (University of Guelph), Christer Wiklund (Stockholm University)
- Reproductive character displacement by the evolution of female mate choice
Ryo Yamaguchi (Kyushu Univ.)
- The promise of Eco-Evolutionary Perspective: Evolutionary Rescue Associated with Reproductive Character Displacement
Daisuke Kyogoku (Kyoto University) Commentators: Toshitaka Suzuki (SOKENDAI) Suzuki Noriyuki (Rissho Univ) Kotaro Kagawa (Univ of Tokyo) Minoru Kasada (Univ of Tokyo)
Commentators: Toshitaka Suzuki (SOKENDAI), Suzuki Noriyuki (Rissho Univ), Kotaro Kagawa (Univ of Tokyo) and Minoru Kasada (Univ of Tokyo)

■基調シンポジウム B

Biogeography: Spatial Partitioning of Diversifying Lineages

Organizer: Takayoshi Nishida (Univ of Shiga Prefecture)

- Incorporating key ecological interactions into biogeography: a simple rule accounting for “primary effect”
Takayoshi Nishida, Takehiro Yoshizaki & Koh-ichi Takakura (Univ of Shiga Prefecture)
- Island biogeography of invasive vs. native plants Koh-ichi Takakura (Univ of Shiga Prefecture)
- Biogeographic variation in reproductive traits and development of cryptic reproductive isolation between local populations in a grasshopper, *Podisma sapporensis*
Yoshikazu Sugano, Kaori Tuchiya-Suzuki, and Shin-ichi Akimoto (Hokkaido Univ)
- Studies of ant invasion should more seriously consider the explicit link to fundamental theories of ecology and evolution.
Kazuki Tsuji (Univ of the Ryukyus)

- ・ Global patterns of diversity and diversification rate in ants
Evan Economo (Okinawa Institute of Science and Technology)

企画シンポジウム 1

カワウ個体群管理の未来

企画責任者 松田裕之 (横浜国立大学)

- ・ 滋賀県のカワウ個体群管理モデルと捕獲目標
西森克浩(滋賀県水産課)
- ・ シャープシューティングがカワウ被害を軽減した成功事例
須藤明子 ((株)イーグレット・オフィス)

企画シンポジウム 2

包括適応度理論の展開：種内関係から種間関係を見据える

企画責任者 土畑 重人 (京大院・農・昆虫生態)・入谷亮介 (九大・理・生物)

- ・ 植物における血縁認識と社会行動
山尾僚 (弘大・農学生命)
- ・ 寄生者の水平感染から、宿主の移動分散の進化を理解する
入谷亮介 (九大・理・生物)
- ・ 種間の"社会"相互作用が引き起こす共進化：遺伝共分散を用いた理解
土畑重人 (京大院・農・昆虫生態)

企画シンポジウム 3

これからのミバエ生態学

企画責任者：鶴井香織 (琉球大学・戦略的研究プ)・本間淳 (沖縄防技セ/琉球産経/琉球大学・農学部)

- ・ 沖縄におけるミバエ類根絶防除とその後の問題
松山隆志 (沖縄防技セ)
- ・ ウリミバエの不妊化と基礎研究：未解決問題 -特にメスの選好性-
宮竹貴久 (岡山大学・院環境生命)
- ・ 海外におけるミバエ類防除の現状
原口 大 (沖縄県農業研究セ)
- ・ ミバエ類の寄主利用と発育パフォーマンスの関係：インドネシアでミバエ研究を行う意義
藤井暢之 1・本間淳 1・籠洋 1・日高直哉 1・来田村輔 2・高倉耕一 1・Sujiono3・沢田 裕一 1・
塚田森生 2・西田隆義 1 (滋賀県大・環境 1・三重大・生物資源 2・BBPOPT3)
- ・ 侵入ミバエに対する新しい防除法の開発に向けて-繁殖干渉の応用利用の可能性
本間 淳 (琉球産経・沖縄防技セ)

一般講演 (ポスター)

[P01] Population dynamics of Hokkaido voles leads to Taylor's law. Takashi Saitoh (Hokkaido University)・ Joel E. Cohen (The Rockefeller University)

- [P02] 岩礁潮間帯固着生物群集における季節性のパターンとプロセスの環境勾配に沿った変化. 金森由妃 (北大・院・環境科学)・深谷肇一 (統数研)・野田隆史 (北大・地球環境)
- [P03] 森林の群集遺伝学: 昆虫群集の年変異は樹木の遺伝変異で説明できるか? 鍵谷進乃介 (北大・院・環境科学)・内海俊介 (北大 FSC)
- [P04] Larval dispersal dampens population fluctuation and shapes the interspecific spatial distribution patterns of rocky intertidal gastropods — 佐原良祐 (北大院・環境)・深谷肇一 (統数研)・奥田武 弘 (国際水研)・堀正和 (瀬水研)・山本智子 (鹿大・水産)・仲岡雅裕 (北大・厚岸臨海)・野田隆史 (北大・地球環境)
- [P05] Interactions between loach (*Misgurnus anguillicaudatus*) and snail (*Bellamya chinensis laeta*) in a paddy field and its effect on rice production. Haruki Takayanagi and Hironori Yasuda (Yamagata Univ.)
- [P06] 群集の種・個体数分布を折れ棒ではなく切れ目をつかって説明する. 岸茂樹 (矢作川研究所)・川津一隆 (龍谷大・理工)
- [P07] エネルギーの流れにサンショウウオが果たす役割は共食いによって変わる. 高津邦夫 (北大・環境)・岸田治 (北大・FSC)
- [P08] 日本脳炎ウイルス媒介蚊の生育段階構造・垂直伝播を考慮した SIR モデル. 渡邊江 (早稲田大・人間科学)・福井眞 (早稲田大・人間科学)・太田俊二 (早稲田大・人間科学)
- [P09] Collective memory of an abandoned egret colony. Miyuki Mashiko (NIAES) and Yukihiro Toquenaga (Univ. of Tsukuba)
- [P10] ニホンザルにおける個体数管理のための将来予測シミュレーション. 平山 寛之・清野 紘 典・檀上 理沙・岸本 康誉 (株式会社野生動物保護管理事務所)
- [P11] 格子空間上の集団のダイナミクスの安定性について. 佐藤一憲 (静大・数理システム)
- [P12] A spatially-explicit integrative model of dispersal process of leaf litterfall. Michinari Matsushita (FFPRI・FTBC)・Kazuhiko Hoshizaki (Akita Prefectural Univ.)
- [P13] 相利共生系の多様性維持メカニズムの数理モデル. 江副日出夫 (大阪府大・院・理)
- [P14] 空間的・時間的アレンジによる薬剤抵抗性管理の有効性: モデルシミュレーションによる各害虫 タイプに対する効果の検証. 山中武彦・須藤正彬 (農環研)・鈴木芳人 (京都市)・高橋大輔 (ウメオ大学)
- [P16] 人為的な移動を考慮した移住カーネル関数によるセアカゴケグモの分布拡大予測. 前川侑子 (阪大・工)、町村尚 (阪大・工)、松井孝典 (阪大・工)
- [P17] Biological pest control in arable fields associated with non-crop habitats. 池川雄亮、江副日出夫、難波利幸 (大阪府大院・理)
- [P18] Non-genetic inheritance of parent-offspring cell structure in the diatom. Yuka Shirokawa and Masakazu Shimada (Univ. of Tokyo)
- [P19] タブノキにおける異型異熟性が交配パターンと結実に与える影響—孤立小集団を例に—. 渡部俊太郎 (滋賀県大・環境)・金子有子 (東洋大)・野間直彦 (滋賀県大・環境)・西田隆義 (滋賀県大・環境)
- [P20] 空間自己相関をもつ攪乱条件下でのクローン繁殖戦略. 福井眞 (早稲田大・人間科学)・荒木希和子 (立命館大・生命科学)

- [P22] 貯穀害虫の垂直個体群構造を決定する要因：資源をめぐる競争か、寄生回避か、そして潜るコストは？ 菅原有真（九大院・生資環・天昆）・津田みどり（九大院・農・生防研）
- [P23] 周期ゼミの周期性進化メカニズムの解明. 伊東啓（静岡大・創造院）・柿嶋聡（静岡大・創造院）・上原隆司（名古屋短大）・守田智（静岡大・院工）・小山卓也（京都大・院理）・曾田貞滋（京都大・院理）・John R. Cooley (Univ. of Connecticut)・吉村仁（静岡大・創造院）
- [P25] キアゲハの春型と夏型の間に見られる照度に対する選好性の違い. 西口泰平・石原道博（大阪府大院・理・生物）
- [P26] Adaptive loss of color polymorphism and character displacements in sympatric *Mnais* damselflies – 椿宜高（京大生態研）、奥山永（京産大生命）
- [P27] Effects of color polymorphism on host plant range in *Colias* butterflies. Suzuki Noriyuki (Rissho Univ)・Yuma Takahashi (Tohoku Univ)
- [P28] タイリクヒメハナカメムシにおける採餌行動の個体間変異が害虫防除に及ぼす影. 世古智一・三浦一芸（近中四農研）
- [P29] Sex difference in random walk patterns enhances mating encounters. 水元 惟暁（京大院・農・昆虫生態）、土畑重人（京大院・農・昆虫生態）
- [P30] 秩序的蟻道形成の持つゆらぎ. 崎山朋子（早稲田・基幹理工） 郡司幸夫（早稲田・基幹理工）
- [P31] Allee effect in termite colony foundation: alate density and flight timing affect pairing success. Ami Kusaka (Kyoto Univ)・Kenji Matsuura (Kyoto Univ)
- [P32] ササコナフキツノアブラムシにおける表現型に依存した兵隊の防衛能力の集団間変異. 服部充（玉川大・農）・小野正人（玉川大・農）・市野隆雄（信大・理、信大・山岳）
- [P33] Personal immunity and monogamous colony foundation in a termite: low-resistance individuals drag down high-resistance partners. Rui Takashima (Kyoto Univ)・Kenji Matsuura (Kyoto Univ)
- [P34] Host-plant and genetic effects on herbivore's fitness and gene expression. Tuda M, Tani S, Iwase S, Saeki Y, Mori K, Tashiro K (Kyushu University)
- [P35] ナガサキアゲハにおける擬態遺伝子の頻度動態推定. 古俣慎也（京都大・理・動物生態）・Chung-Ping Lin（台師大・生命科学）・曾田貞滋（京都大・理・動物生態）
- [P36] Resistance to invasive congener's pollen in Japanese dandelion: reproductive character displacement in response to biological invasion? 京極大助（京都大・理）
- [P37] 沈水植物群落が競争・捕食相互作用を介して湖の水質に及ぼす影響. 丸野慎也・浜端悦治・西田隆義（滋賀県大・環境）
- [P38] 寄主植物ウマノズクサを共有する2種のチョウの共存機構. 橋本洸哉（京大生態研）・大串隆之（京大生態研）
- [P39] トノサマガエルとナゴヤダルマガエルの琵琶湖周辺における分布様式と種間関係. 中西康介（名大・院・環境／滋賀県大・環境）・本間淳（琉球産経／滋賀県大・環境）・古川真莉子・高倉 耕一・藤井暢之・森井清仁・寺澤祐貴・羽田野遥平・西田隆義（滋賀県大・環境）
- [P40] Effects of trophic subsidy on plant-pollinator dynamics. Gaku Takimoto (Univ. of Tokyo)

- [P41] Genome-wide SNP analysis reveals local evolution of feeding preference in the leaf beetle *Plagiodera versicolora*. Hirono Onodera(Hokkaido Univ.), Masaki Yasugi(NIBB), Hiroshi Kudoh(CER, Kyoto Univ.), Atsushi Nagano (Ryukoku Univ.), Shunsuke Utsumi (FSC, Hokkaido Univ.)
- [P42] 昨日の敵は今日の友? : 捕食圧と競争相手がもたらす希釈効果の相互作用. 小楠なつき (北大・農)・長谷川英祐 (北大・農)
- [P43] Herbivore-mediated interaction promotes the local coexistence of trichome dimorphism in a plant population. Yasuhiro Sato (CER, Kyoto Univ.)・Hiroshi Kudoh (CER, Kyoto Univ.)
- [P44] 新芽が赤いのは植食者に対する警告信号か. 平野正樹・井出純哉 (久工大・工・教育)
- [P45] 外来種ヒロヘリアオイラガの衰退をまゆの捕食痕からさぐる. 古川真莉子・沢田裕一・中西康介・高倉耕一・西田隆義 (滋賀県大・環境)
- [P46] 呑み込み方向で食べやすさが決まる?ー在来魚駆逐メカニズムの解明ー. 平藪直樹・西田隆義 (滋賀県大・環境)

研究室紹介：九州大学 農学部附属生物的防除研究施設 天敵昆虫学研究室

「生物的防除学のすすめ」

菅原有真・福田一人

● 生防研の概要

生防研はアジア唯一の生物的防除専門の研究機関として、1964年に設置され害虫の病原微生物を扱う天敵微生物学部門と天敵昆虫を扱う天敵昆虫部門の2つの研究室で構成されています。天敵昆虫を扱う私たちの研究室は、侵入害虫に対して原産地の天敵を導入して防除を図る伝統的生物的防除を中心に天敵を用いた害虫防除に関わる基礎的・応用的なテーマを幅広く扱っています。場所は九大の箱崎キャンパスの農学部6号館です。6号館の入り口には生物的防除研究施設の古い木製の表札があり、生物的防除の殿堂といった趣があります。伊都の新キャンパスに移った後は、このような独立した施設ではなくなるので、些か残念ではあります。

● 教員の顔ぶれ

前教授の高木正見先生が今年で退官されたので現在、上野高敏、津田みどりの2人の准教授が中心となって学生の指導を行っています。上野先生は水田の天敵相の解明や近年、対馬に侵入し、生態系への影響や養蜂業への被害が問題となっている外来種のツマアカスズメバチの現地でのモニタリングをされていて根っからのフィールドワーカーです。ツマアカスズメバチの件はメディアでも大きく報じられました。またアオムシヒラタヒメバチを用いた独自の実験システムで寄生蜂の行動生態を調べておられます。海外調査の折には必ず珍しいブンブン(ハナムグリの甲虫)を採集されており、昆虫マニアの巣窟である昆虫研の先生方からも一目置かれているほどに

採集が上手です。海外調査から帰ってくるたびに旅先で見つけたカッコいい昆虫の写真をFacebookにupされていて、調査の合間にもしっかりと趣味虫の探索をされている先生の観察眼には感服です。

津田先生は主にマメゾウムシなどの植食性昆虫を用いて食う者と食われる者の進化的相互作用、気候変動の影響、植食性昆虫の種分化の誘因となりうる寄主植物範囲拡大の生態学的・遺伝子発現メカニズムを追及されています。日本のお家芸とも言える貯穀害虫のマメゾウムシを用いた実験室生態系だけでなく、アジア・欧州の植物(特にマメ科種子)を資源とする昆虫生態系を調査し、植物と昆虫のデータベース作りやマメゾウムシを中心とした新種記載などにも取り組まれています。植食性昆虫のホストシフトが起こるメカニズムについて、分子生物学的な手法を用いて遺伝子発現を調べたり、食う-食われる系でトレードオフが個体群に与える影響を数理モデルを用いて予測したりと、生防研の研究の幅を広げておられます。ハンガリーを拠点にほぼ毎年調査をされて「第二の故郷」らしいです。

● 学生の特徴

生物的防除専門ということもあって、研究室には毎年多くの留学生や時には訪問研究者・ポスドクがやってきます。学生はミャンマーなどの東南アジアが多いですが、ヨーロッパ、北米、アフリカから学生や研究者が来ることもあり、非常に国際色豊かな研究室です。これは前教授の高木先生や津田先生の努力の賜物で、生防研で学んだ留学

生が国に帰って生物的防除の先鋒として活躍してくれることを見据えて積極的に留学生を誘致してこられました。生物的防除への世界的な関心の高まりと、先生のお人柄でたくさんの留学生が毎年、出入りしています。日本人学生にとっても普段から英語を使ったコミュニケーションが多いので、自然と英語の会話力がつくという利点があります。留学生の中には在学中に日本語が話せるようになる人もいて、日本人学生の英語のミスを日本語で解説してくれたりします。

● 論文ゼミの様子

研究室では毎週一回、学生が担当を決めてトピカルな論文を紹介するゼミを行っています。論文はそれなりに新しいものを選ぶ以外には特に制限はなく各個人が興味の赴くまま自由に興味深いと思う論文を持ち寄ります。人数があまり大きくない分、質問がしやすく、議論の末に論文の結果を発展させて新しいテーマが生まれることもあります。最近では留学生の参加者も増えたので、プレゼンもなるべく英語で行うようになりました。英語を使って議論するのは非常に良い勉強になりますし、本質的な質問をぶつけられた時の応答で発表者の論文の理解度がモロに分かります。

● 研究室の雰囲気

学生のみならず、教員との距離も良い意味でフランクです。居住環境も整っているので、ほとんど研究室に住んでいるような人もいるくらい居心地は良いです。研究の息抜きに圃場で作物を作り、収穫した野菜で料理をすることもあります。時には留学生が国の料理を振る舞ってくれることもあります。近所のスーパーで手に入るような材料でも郷土料理はある程度再現できます。また昆虫マニアの学生が大学近郊の山でクワ

ガタやカブトを採集に行くのは、もはや夏の恒例行事となりました。おかげで学生部屋は趣味の採集で集めてきた昆虫類でひしめいています。最近では、管住性の有剣ハチ類の営巣行動を観察するために圃場や大学のあちこちに竹筒で作ったハチマンションを設置して観察するのが流行となっています。

● 研究内容

実践的な生物的防除の研究はもちろん、害虫や天敵の基礎的な生活史や生存戦略を探る研究にも取り組んでいます。各自の研究内容について詳しく知りたい方は

<http://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/ine/>をご覧ください。我が研究室の至上命題である生物的防除にながしかの形で関係するテーマを各々行っていますが、材料とする生物は多岐にわたります。高木先生は伝統的生物的防除を中心に実践的な研究を行われており、特にレンゲの害虫として問題となっている侵入害虫のアルファルファタコゾウムシの防除に関わる研究は現在も続いています。津田先生の提案で害虫のハプロタイプを推定、日本侵入後の遺伝的系統の変遷と原産地の推定、導入天敵であるヨーロッパトビチビアメバチの幼虫繭が飛び跳ねることの適応的意義など、多くのメンバーや他大学の共同研究者がこの



図1 アルファルファタコゾウムシの共同研究者と調査後の慰労会

プロジェクトに関わっています(図1~3)。



図2 アルタコの導入天敵 ヨーロッパトビチビアメバチ



図3 ヨーロッパトビチビアメバチの幼虫繭
(5個体が跳躍中)

上野門下はフィールドワークを中心に実験を行っている学生が多いです。ハモグリバエの寄生蜂のパフォーマンスに蜜源が与える影響、果樹カメムシ類の天敵のタマゴクロバチの卵塊防衛行動とそのコスト、フジコナカイガラムシの天敵寄生蜂に人工のフェロモントラップが与える影響など土着天敵の生態を調べている学生やタイリクヒメハナカメムシの果実を用いた大量増殖法など天敵の放飼増強につながるテーマを扱っている学生もいます。留学生には国に帰っても役立つ

研究をしてもらうために、汎世界的な害虫や天敵資材を扱ってもらう事も多いです。野外から直接採集してきた害虫や天敵を実験に使うことが多いので、昆虫の飼育スキルが高く、実際の生物をみて命題定立型のテーマに個人プレーで各々取り組んでいます。

津田門下は主にマメゾウムシという実験生物を武器に、食う-食われるの個体群動態に気候変化や導入天敵種数が与える影響などの普遍的なテーマを追求しています。飼育もしやすく、世代期間も短いモデル生物を使っているので学生同士の情報共有や実験の補助がやりやすく、チームプレーで仮説検証型の研究をするのが得意です。室内実験とはいえ、体力も集中力も必要ですので、根気よくマメにデータを取る学生が多いです。特に累代実験では1年以上、毎日継続的にデータを取らねばならないので、休暇をとりたいときには、マメゾウムシチームの別の学生に頼んで実験を代わってもらったりします。

豆を塩ビパイプなどに詰めて、直上からマメゾウムシを投入すると意外に良く潜ります。M2の菅原はこのような垂直方向の移動分散に生物間相互作用が与える影響を探求しています。具体的には資源を巡る種内競争や天敵からの捕食回避、雌雄の性的対立などが移動分散に与える影響を、垂直方向に長い容器を製作して、ヨツモンマメゾウムシなどの垂直移動分散やその世代間変化をモニタリングします。種内干渉の激しいコンテスト系統がスクランブル系統よりもメスが良く潜ることや、親個体数が増えるとオスの移動分散が促進されること、また体サイズの小さな個体ほど良く潜ることがわかりました。現在は、オス個体数を変動させることでメスに対するオスのセクハラが移動分散に与える影響を調べています。移動分散のメカニズムを明らかにすることは、生態系

の仕組みを理解する上でも、農地環境における害虫管理のような応用的な側面でも重要なので、この実験系を使った研究成果が一般的な移動分散の仕組みへの提言になればと考えています。

D2の福田は生物の集団内多型維持機構のモデルケースになる研究を目指して日々励んでいます。アリの社会的多型、チョウの季節的多型、バッタの相変異など、多型は多くの生物の形態や生態であるものの、多型維持の遺伝的背景や形質可塑性の全容はこれから解明が進む領域です。触角は節足動物にとって重要な感覚器官で、その節数は形態分類の指標となる保存的形質です。マメゾウムシ亜科の触角は普通11節から成ります。しかし、アフリカに生息しササゲの貯穀害虫であるローデシアマメゾウムシでは、雌雄ともに節数が1、2節不足した個体が集団内に一定の割合で維持されていることが櫻井さん（前ポスドク）や津田先生によって発見されました。また触角節数に選択圧をかけると7節個体まで現れ、節数は遺伝的で他の形質との関係もあることがわかりました（福田、中平助教、ポスドク柳、佐伯、津田先生）。節数不足の個体は、正常個体と比べ自然選択や配偶者選択において有利だったり、触角節数と他形質の間のトレードオフや性的対立があったりする、という予想を立て、節数の異なる個体間で適応度形質や触角の感覚毛の変異を比較し、続々と興味深い結果を得ています。

● オープンキャンパス

生防研では毎年、8月上旬のオープンキャンパ

スに研究室の公開を行っています（図4）。展示物は各々の研究をまとめたパネルや実験に使っている昆虫の生体展示、研究に使っている機材などで、学生が見学に来た高校生に生防研の研究を紹介します。生体展示で毎年人気なのが、ヨーロッパトビチビアメバチの幼虫繭（図3）で、ぴょんぴょん跳ね回る繭を見て、多くの高校生が目を丸くしています。繭の跳躍は生防研のHPでも動画をupしているので興味のある方は御覧ください。毎年来訪者は100人前後で、最近では来訪者に研究室のオリジナルグッズ（しおり、ステッカー、缶バッジなど）を記念に配るなどの工夫もしています。生物的防除は我が国でも普及しているとは言えない状況なので、少しでも多くの人に生物的防除と生防研を知ってもらうためにオープンキャンパスでの取り組みは今後も続けていきたいと考えています。



図4 オープンキャンパスの様子

研究室紹介：九州大学理学研究院（ゲノム）生態科学研究室

佐竹暁子・細川貴弘

風に揺れる木々、太陽光に輝く水田の水面、蝉の声。これが私たちの研究室から見える夏の光景と音の風景です。およそ一年前の2015年秋に九大理学研究院は、福岡箱崎キャンパスから伊都キャンパスへ移転しました。箱崎キャンパスで耳慣れた航空機の飛行音の代わりに、虫や鳥の鳴き声や耕運機が働く音が響く長閑な田園地帯の一角に、私たちの新しい研究室があります（写真1）。

ゲノム生態学研究室は、九大の大学改革活性化制度によって2014年に開始された研究室です。実質は古くからある生態科学研究室と一体化して活動していますが、ここでは主に最近配属されたメンバーの方々に、研究室を紹介していただこうと思います。



写真1 私たちの研究室がある建物ウェスト一号館

研究室横断のススメ（佐竹暁子）

生態科学研究室教授の矢原徹一先生に、「熱帯雨林の研究をしたいんですけど．．．」と漠然とした質問を投げかけたのは、今から数十年前、私がまだ九大の学部4年生だった頃です。大学院で生

態学を学ぶにあたり、フィールドをメインにするか、それとも理論研究を学ぶか、いずれにも興味があった私には難しい選択でした。同じ質問をお隣の数理生物学研究室教授の巖佐庸先生にすると、「数理生物学やったら熱帯雨林にいけるで」と即答してくださり、そうか！と信じ数理生物の道を歩み始めました。そして今は、生態科学研究室のスタッフとして、フィールドと理論、そしてゲノム科学のアプローチを結びつける研究に邁進していることに、運命を感じています（詳しい経緯については、数理生物学会ニュースレター第70号を参考にしてください）。

<http://www.jsmb.jp/newsletter/newsletter.html>）。

細分化や専門化が進みつつある現在の学術世界ではありますが、九大の理学研究院では、生態学、進化遺伝学、数理生物学の3つの研究室が連携することで、分子から生態系、そして人間社会までを対象に、深淵な自然の秘密に迫ることができる素晴らしい環境だと私は思っています。研究室で開催しているQecoセミナーでの講演者も募集中ですので、興味のあるみなさん、ぜひお立ち寄りください。

共生微生物の驚くべきチカラを愉しむ

（助教：細川貴弘）

大学院生時代の私は動物の雌雄間相互作用に興味があり、九大の生態科学研究室において行動生態学の研究で博士の学位をいただきました。学位の取得後は共生微生物を伝播するための宿主動物の行動についての研究を始め、さらには共生微

生物が宿主の生態と進化に与える影響やそのメカニズムへと興味の中心が移っていきました。結果として自分の研究上の興味は九大の生態科学研究室の色からはかなり外れたものになったと感じていたのですが、一昨年9月、ゲノム生態学研究室という新しい方向を目指した枠で採用していただくことになり11年半ぶりに九大に戻ってきました。現在は私の興味と従来の生態科学研究室の色をうまく調和させた研究室にできるよう、日々研究のネタを模索しています。

共生微生物は一般的に宿主生物とは比べものにならないくらいに小さな生き物ですが、宿主生物の生態や進化に驚くほど大きな影響を与えています。たとえばアブラムシ類では共生微生物が宿主の寄主植物の幅を広げたり、寄生蜂や寄生菌に対する抵抗性を高めたりすることが知られています。また、多くのカメムシ類は成長に必須な栄養分を共生微生物に合成してもらっており、共生微生物なしには正常に成長することができないのですが、宿主には共生微生物を母親から子に確実に伝播するための実に精巧な行動が進化しています。このようなワクワクしてしまう共生微生物のチカラを学生の皆さんと一緒に愉しんでいければと考えています。

自然に囲まれて数学をする

(D2 大原隆之)

私の研究テーマは、生物が持つ自律的なペースメーカー（概日時計）が、植物の炭素代謝、成長をどのように制御しているのかを、それらの相互作用を組み入れた数理モデルを構築して解析していくことです。したがって、普段は基本的にコンピューターの前で、数式やシミュレーション結果などとにらめっこしていることが多いです。一方で、私達の研究室があるキャンパス内には、生態

系保全ゾーンと呼ばれる里山をそのまま残した環境があります。「数学に必要なのは静寂である」とは誰の言葉だったか忘れましたが、雑音から隔離された森の中を歩きながら思索することで、新たな解決策や研究のアイデアが生まれることもしばしばです。自然を残すことの効能はこんなところにもあるのでしょう。



写真2 満開のウマノアシガタとそれを訪花するベニシジミ。花を観察していると、色々な昆虫にも出会える

生物多様性保全ゾーンでの植物開花フェノロジーの研究 (M1 川窪藍)

九州大学伊都キャンパスには、生物多様性保全ゾーンという野生動植物の保全を図っている区域があり、田舎ののどかな里山のような景色が広がっています。私は、その保全ゾーンに生育する植物の開花フェノロジーについて調べています(写真2)。季節を追って観察を続けると、様々な植物の開花の始まりと終わりの時期とその違いを知ることができます。「これらの種による開花フェノロジーの違いは何(気温・日長・降水量などの環境因子)が生み出しているのか?」「それらの因子は植物種の系統関係により、どの程度共通するのだろうか?」そんな疑問を持って調査をしています。また、室内ではハクサンハタザオを栽

培し、人工的に気温を上昇させたときに変化する開花フェノロジーについても調べています。植物の開花が周りの環境から受ける影響について詳細に知ることができたらと思い、日々ハクサンハタザオに水やりをしつつ、保全ゾーンを駆け回っています。

自分に合った研究をとことん楽しめる場所

(B4 上野弘人)

自分から見た生態研について紹介いたします。研究テーマに関しては確かに全部が全部なんでもやってもいいよというわけではないですが、基本的には個人の興味、関心、特性を十分考慮してその人にあった研究テーマを与えてくれるのでやる気を持って楽しく研究が出来ます。自分は昆虫が好きで、特にクワガタムシやカブトムシなどの甲虫が好きなのですが、それを尊重していただき、今、京都大学の市岡先生のお力も借りてランビルのクワガタムシの季節性について研究を進めています (写真3)。



写真3 マレーシアでの調査

その他で紹介しておきたいこととしては、毎週1度開かれるセミナーがあります。生態研は人数が多くかつ研究範囲も広いので、このセミナーでは生態学に関わる様々な分野の方々が集い、広く、深く、自分の研究にコメント、アドバイス、学習

にヒントを貰え、力を伸ばすことができます。

総じて言うならば、生態研は基本的には自由に、楽しく、しかし、やるときにはしっかりレベルの高いところで研究が出来る最高の場所だと思います。

カメムシに恋をしそう

(B4 今西萌美)

私はもともと様々な場所で増殖し、環境や生物に多くの影響を与える細菌に興味がありました。そんな私が生態科学研究室に入ろうと思ったのは細川先生の研究内容を知って、面白い!と思ったのがきっかけでした。研究ではカメムシを飼育しているのですが、虫が苦手な私は初め「カ、カメムシか…」と不安に思っていました。しかし、研究室の方々から昆虫の面白い生態を聞いて、敬遠の対象から興味の対象に変わりました。カメムシに関して言えば、ちょっと好きかも…と思うようになりました。今ではワクワクしてしまう共生微生物のチカラを先生と一緒に愉しんでいます。

「Qecoセミナー」知っとーと?

(元学術研究員 日室千尋)

Qecoセミナーとは、2015年に立ち上げた生態科学研究室主催の九州 (Q) ecological セミナーばい。生態学ば関するあらゆる研究について、第一線で活躍中の研究者ばお招きして、講演会ば開いとーばい。当時、九大には、生態学ば関する対外的なセミナーが少なかったばい、たくさんば生物に関する研究者がおるとに、お互いの繋がりがあまりないとは、バリもったいなかーと思い、有志何人かで立ち上げたったばい。

こんまでに、国内外の14名以上ん研究者に、昆虫食から物質循環、種分化、霊長類の視覚ん進化まで様々なテーマで講演しよって頂いたばい。

そしてメインは懇親会たい！！天神、中洲、博多の夜に繰り出したい。焼酎、モツ鍋、水炊き、ラーメン、刺身、焼き鳥・・・博多のうまか飯、うまか酒があんたを待っとーと（ここだけん話、なんと講演者はタダ飯、タダ酒たい。ムフフ）。九大内外、教員、学生ば問わず自由な参加をお待ちしておるけん。また、講演者ば募集しとーとー、希望されん方ば世話人までご連絡くれんね。

そうくさ、みんな「Qecoセミナー」に行きまっしょーたい！

天神、中洲で熱か議論ば交わそうや。



写真4 研究室サロンの様子、細川さん、日室さん

事務局報告

内海俊介 (事務長)

●2015年度第2回個体群生態学会運営委員会
兼 理事会 議事録

日時：2015年10月10日 (土) 14:00~17:00

場所：滋賀県立大学

出席：齊藤、内海、岸田、石原、近藤、瀧本、辻、
津田、椿、西田、松浦、宮竹、内海、谷川 (PE
報告代理、オブザーバー)

委任状：巖佐、粕谷、佐藤、仲岡、吉田

報告事項

1. 選挙結果 (開票平成27年8月26日) (岸田)
・選挙管理委員から構成される推薦会議より以下の報告があった。

○理事兼副会長候補者選挙

当選 松田 裕之 (5票)

次点 曾田 貞滋 (5票)

○理事候補者選挙

当選 瀧本 岳 (21票), 津田 みどり (21票),
内海 俊介 (20票), 粕谷 英一 (18票), 近藤 倫
生 (17票), 山内 淳 (17票), 宮下 直 (16票),
徳永 幸彦 (14票), 野田 隆史 (14票), 宮竹 貴
久 (14票), 岸田 治 (13票), 浅見 崇比呂 (12
票)

次点 嶋田 正和 (12票)

松田会員と曾田会員は同票であったが、役員規則
第8条5. (副会長候補者の選挙においては、同票
の時には高齢者を当選とする。理事候補者の選挙
の場合には、下位同票のときには役員未経験者、
若年者の順で当選とする。)に従い松田氏が当選。

2. 事務局報告 (内海)

・NPO法人への移行に関し、300名の会員のうち
230名が同意して移行した。

3. PE編集 (谷川)

・出版状況は順調。著者の満足度においては査読
時間の長さが若干低評価である。

・投稿論文のクロスチェックの結果、4分の1の
原稿について剽窃の疑い (重複が強い箇所) があ
り、著者に書き換え・引用を指示した。5本の原
稿を棄却・取り下げとした。

4. 会報編集 (津田)

・経費削減のため350部から300部へと印刷
部数を減らした。ページ数も10ページ程度減ら
した。故伊藤嘉昭元会長の追悼文を掲載。

5. 生科連報告 (内海)

・生科連の連絡委員の吉田理事より第12回定例
会議の報告がメール文面であった。

・生科連の連絡委員としての吉田理事の担当は今
年度で終了。次年度は交代となる。

6. 2015年度大会 (西田)

・事前参加登録94名、基調シンポ2件、企画シ
ンポジウム3件にて開催。滋賀県立大学は無料で
使用できた。滋賀県立大学から10万円の補助が
支給された。

7. 2016年度大会準備状況 (齊藤)

・札幌大会：定山溪にて合宿形式で10月か11
月に開催する予定。仮テーマをEvolutionary
Demographyとし、2012年に欧米の研究者が中心と
なって設立されたEvolutionary Demography
Societyとの連携を深め、この学会の中心メンバ

一2名を招いて基調シンポを開催する予定。このほか2件程度の企画シンポを開催する。

8. その他

- ・前回の理事会でPE冊子体の寄贈取りやめを決定した。
- ・支出削減のためにPEの印刷部数を400部から300部あるいは200部に減らす。
- ・入会時のデフォルトをオンライン会員とする。

審議事項

1. メーリングリスト (岸田)

・メーリングリストメールが不達になることが多いため、今後は原則的にメーリングリストを使わないことで合意した。

2. 2014年度決算案/2015年度予算案 (内海)

・決算案と予算案が承認された。

3. 次期理事の改選と役員規則の改訂について (内海)

・2期連続理事を務めている場合、現在の役員規則では会長・副会長・専務理事(=事務長)になることができない。このため役員規則(第7条)を以下のとおり改定することを総会に提案することになった。

○改定前:理事の任期は……。再任は妨げないが、連続三選を禁ずる。

○改定後:理事の任期は……。再任は妨げない。

ただし、会長、副会長、専務理事を除き連続三選を禁ずる。

4. 奨励賞選考委員会の選出 (内海)

・次期の理事会にて奨励賞選考委員を選出することが確認された。

5. 総会の議題 (内海)

10月11日に行われる総会の議事次第が承認された。

6. その他

・今後も春の理事会はTV会議システムを使うことが確認された。休日はTV会議システムを使えない大学が多いことから、平日に実施することを検討する。

●2015年度個体群生態学会総会議事録

日時:2015年10月11日(日)17:00~18:20

場所:滋賀県立大学

会員数268(定足数134)、出席数160(内訳 参加者48名、委任状提出者112名)成立

1. 会長挨拶(斉藤会長)

法人化後の総会の位置づけ等について説明があった。

2. 事務局報告(内海事務長)

法人への移行手続きが終了したこと、年度替わりが9月1日であることの説明があった。

3. PE編集部報告(佐藤編集長)

・投稿数が減少気味で、国内会員の投稿の増加が望ましいこと、2012・2013年に特集がなかったことでインパクトファクターが減少しているが、2014年以降特集が組まれているのでインパクトファクターの回復が期待されることが説明された。

・投稿された2報の論文に剽窃があり、取り下げとなったことが報告された。

4. 会報編集報告(津田編集長)

・白表紙に故伊藤嘉昭元会長の追悼文を掲載したこと、部数とページ数を減らすことで印刷費を削減したことが報告された。

5. 2016年度大会(斉藤会長)

・北海道にて、温泉の合宿形式で行う予定が案内された。

・Evolutionary Demography学会との協力関係を築くために2-3名ほど招待する予定が紹介された。

6. 審議事項:2014年度決算・2015年度予算(内海事務長)

・NPO移行に際する会計手続き、昨年度の決算および今年度予算が説明され、決算案と予算案が承認された。

7. 審議事項:定款の変更(内海事務長)

・執行部より、(任期等)第16条について、“ただし、再任を妨げない”の文章を削除することが提案され(会長の再任を防ぐことが目的)、承認された。

8. 審議事項:規則の変更(内海事務長)

・役員規則(第7条)を以下のとおり改定することが執行部より提案され、承認された

○改定前:理事の任期は……。再任は妨げないが、連続三選を禁ずる。

○改定後:理事の任期は……。再任は妨げない。ただし、会長、副会長、専務理事を除き連続3選を禁ずる。

9. 審議事項:理事の選出(推薦会議からの推薦、岸田理事)

・推薦会議より、理事兼副会長候補者と理事候補者が推薦され、承認された

理事兼副会長候補者 松田 裕之

理事候補者 瀧本 岳,津田 みどり,内海 俊介,粕谷 英一,近藤 倫生,山内 淳,宮下 直,徳永 幸彦,野田 隆史,宮竹 貴久,岸田 治,浅見 崇比呂、

・追加の理事候補者として、椿会員、石原会員、佐藤会員が推薦された。また、監事として齊藤会員が推薦され、いずれも承認された。

10. 任意団体の解散(齊藤会長)

・任意団体の解散が提案され、承認された。

●任意団体解散後のNPO法人としての新年度(2015年9月1日~2016年8月31日)を2015年度

とする。

●2015年度第1回個体群生態学会理事会議事録

日時:2015年10月11日(日)18:20~18:30

場所:滋賀県立大学

出席:浅見、内海、石原、岸田、近藤、佐藤、瀧本、津田、椿、徳永、野田、松田、宮竹、山内、齊藤

審議事項

1. 新理事会の発足

・総会によって新たに理事が選出されたことにもない、新理事会が発足したことが確認された。

・理事の互選による役員の選出を行った。その結果、椿宜高会長、松田裕之副会長、石原道博専務理事が選出された。

・議事録署名人として内海俊介と石原道博が椿宜高会長によって指名され、理事会において承認された。被選任者は、いずれもその就任を承諾した。

●2015年度第2回個体群生態学会理事会議事録

日時:2016年6月14日(火)13:30~17:00

場所:京大大学生態学研究センター(ビデオ会議)

出席:浅見、内海、石原、粕谷、岸田、佐藤、椿、徳永、野田、宮竹、山内、齊藤(2016年度大会会長)、肥山(土倉事務所、オブザーバー)

報告事項

1. 永年会員への推薦(椿)

・藤井宏一会員が理事会より永年会員に推薦されたことが報告された。

2. PE編集(佐藤)

・投稿数の減少、特に日本からの投稿数が半減したことに伴い、受理論文の蓄積がなくなってしまうため、例年に比べて出版が遅れる可能性があることが報告された。

3. 会報編集 (津田)

・メール文面にて、次号の内容について報告された。

4. 2016年度大会 (齊藤)

・2016年11月3日～5日に北海道札幌市の定山溪温泉鹿の湯で開催される大会について、実行委員体制、参加費、スケジュール、シンポジウムの内容などが報告された。

5. 2017年度大会準備状況 (粕谷)

・九州大学の新キャンパス (伊都キャンパス) にて開催される予定であることが報告された。

6. 事務局報告 (石原)

・NPO法人として京都市に2014年度の事業報告がされたことについて報告された。

審議事項

1. PEの新方針について (佐藤)

・佐藤PE編集委員長より、PEに論文賞を設けること、PEの宣伝等にSNSを活用することが提案され、

承認された。学会の費用補助による論文のオープンフリーアクセス化については継続議論となった。

2. 奨励賞 (内海)

・2016年度奨励賞を山道真人会員に授与することが決まった。

3. Editorial Coordinator (EC)の待遇について (佐藤)

・Editorial Coordinatorの作業内容と編集費報酬について確認を行った。

4. 今後のあり方 (椿・石原)

・年次大会における会計口座の取扱について提案がなされ、承認された。

・学会からのメール連絡を、今までのメーリングリストから一斉メール配信に変更することが承認された。

・代表者変更の手続きの流れについて確認がなされた。

・法人の登記申請書類については、定款変更は司法書士に、資産登記は土倉事務所に依頼する。

2014年度 活動計算書1

2014年4月1日から 2014年8月31日まで

個体群生態学会
(単位: 円)

科目	金額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費	1,118,000	
学生会員受取会費	44,000	
正会員ウェブ会員受取会費	384,500	
学生ウェブ会員受取会費	52,500	
外国1会員受取会費	22,500	
外国2会員受取会費	12,000	1,633,500
2. 受取寄付金		
受取寄付金		-
3. 事業収益		
(1) 個体群生態学普及啓発事業収益		
大会収入		
会誌編集補助 (シュプリンガー)		-
(2) 学会奨励賞授与事業収益		
4. その他収益		
受取利息	149	149
雑収益 (学術著作権協会複写使用料)	210,812	210,812
経常収益計		1,844,461
II 経常費用		
1. 管理費		
(1) その他経費		
会誌編集費	537,420	
会誌編集報酬	-	
会報印刷費	79,380	
会報編集費	57,400	
事務委託費	-	
印刷・通信費	24,653	
事務長事務費	27,430	
旅費交通費	415,884	
選挙費	-	
大会費 (2014年度)	-	
雑費	8,869	
法人化経費	-	
生科連会費	50,000	
管理費計		1,201,036
経常費用計		
当期経常増減額		
III 経常外収益		
1. 固定資産売却益		
経常外収益計		
IV 経常外費用		
1. 過年度損益修正損		
経常外費用計		
税引前当期正味財産増減額		-
法人税等		-
当期正味財産増減額		643,425
前期繰越正味財産額		2,067,295
次期繰越正味財産額		2,710,720

2014年度 活動計算書2

2014年9月1日から 2015年8月31日まで

特定非営利活動法人 個体群生態学会
(単位：円)

科目	金額		
I 経常収益			
1. 受取会費			
正会員受取会費	120,000		
学生会員受取会費	42,000		
正会員ウェブ会員受取会費	30,500		
学生ウェブ会員受取会費	35,000		
外国1会員受取会費	10,000		
外国2会員受取会費	23,000		260,500
2. 受取寄付金			
受取寄付金	8,581,829		8,581,829
3. 事業収益			
(1) 個体群生態学普及啓発事業収益			
大会収入 (2014年度)	1,081,900		
会誌編集補助 (シュプリンガー)	1,390,000		2,471,900
(2) 学会奨励賞授与事業収益			
4. その他収益			
受取利息	170		170
雑収益 (学術著作権協会複写使用料)	-		-
経常収益計			11,314,399
II 経常費用			
1. 管理費			
(1) その他経費			
会誌編集費	1,436,922		
会誌編集報酬	127,502		
会報印刷費	59,616		
会報編集費	56,440		
事務委託費	720,360		
印刷・通信費	308,722		
事務長事務費	51,050		
旅費交通費	22,730		
選挙費	50,892		
大会費 (2014年度)	1,048,330		
雑費	20,867		
法人化経費	44,400		
生科連会費	-		
管理費計			3,947,831
経常費用計			
当期経常増減額			
III 経常外収益			
1. 固定資産売却益			
経常外収益計			
IV 経常外費用			
1. 過年度損益修正損			
経常外費用計			
税引前当期正味財産増減額			-
法人税等			-
当期正味財産増減額			7,366,568
前期繰越正味財産額			-
次期繰越正味財産額			7,366,568

2015年度 活動計算書 (予算案)

特定非営利活動法人 個体群生態学会
(単位: 円)

科目	金額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費 8000*118人	944,000	
正会員ウェブ会員受取会費 7500*58人	435,000	
学生会員受取会費 3000*14人	42,000	
学生ウェブ会員受取会費 2500*16人	40,000	
外国1会員受取会費 5000*4人	20,000	
外国2会員受取会費 6000*2人	12,000	1,493,000
2. 受取寄付金		
受取寄付金	0	-
3. 事業収益		
(1) 個体群生態学普及啓発事業収益		
大会収入 (2015年度)	1,000,000	
会誌編集補助 (シュプリンガー)	1,890,000	2,890,000
4. その他収益		
受取利息	200	200
雑収益 (学術著作権協会複写使用料)	50,000	50,000
経常収益計		4,433,200
II 経常費用		
1. 管理費		
(1) その他経費		
会誌編集費	2,000,000	
会報印刷費	60,000	
会報編集費	57,000	
事務委託費 (土倉事務所)	720,000	
印刷・通信費	300,000	
事務長事務費 (HP維持, EC旅費など)	130,000	
旅費交通費 (理事会補助)	50,000	
選挙費 (隔年開催)	-	
大会費 (2015年度)	1,000,000	
雑費	50,000	
生科連会費	50,000	
-	-	
管理費計		4,417,000
経常費用計		
当期経常増減額		
III 経常外収益		
1. 固定資産売却益		
経常外収益計		
IV 経常外費用		
1. 過年度損益修正損		
経常外費用計		
税引前当期正味財産増減額		-
法人税等		-
当期正味財産増減額		16,200
前期繰越正味財産額		7,366,568
次期繰越正味財産額		7,382,768

第57巻(2015年)は論文総数60本、658ページで発行しました。第58巻(2016年)は3号まで入稿を終えて、現在4号の編集中です。投稿数の減少に伴い、受理論文の蓄積がなくなってしまうため、出版が遅れる可能性があります。会員のみならずから更に多く投稿していただきますようお願いいたします。

投稿状況

別表(表1)のように、2015年の投稿論文数の合計は123本(うち特集論文は7本、総説は0本)でした。地域別に見ると、欧州(28.5%)がもっとも多く、日本を除くアジアと北米(ともに19.5%)がそれに続いています。日本(10.6%)からの投稿数が顕著に減少していません(昨年は16.4%)。国別投稿数の1位はアメリカの20本で、前年と同数でした。また、多様な国から投稿される傾向は維持されています。

2016年のこれまでの投稿数は59本です。これは、一昨年同期の84本、昨年同期の69本を下回っています。

2015年度の投稿論文の最終的な受理率は、平均で30.1%でした。2013年が29.9%、2014年が37.3%となっています。この数値は地域による変異が高いのが特徴です。日本からの論文の受理率は圧倒的に高く(ほぼ60%)、北米および欧州が平均よりも高くなっています。アジア(日本を除く)の受理率は低く、オセアニア、アフリカ、中南米、中東からは投稿数も受理率も低いという結果でした。

日本から投稿される論文は受理率も高いことから、投稿数の減少は受理論文の減少に極めて深刻な影響を与えます。日本からの投稿を増やすためにも、*Population Ecology*をさらに魅力的な雑誌とするための知恵を絞っていく必要があると痛感しています。ぜひ会員の皆さんからのご意見をお寄せください。

審査経過

2015年に受け付けた論文のうち74.0%(91編)は60日以内に1回目の審査を終え、著者にその

結果を伝えました(図1)。1回目の審査日数の平均値は39.8日、査読に回らず編集長、副編集長、担当編集委員の段階で棄却された原稿(Editor reject)の割合は41.5%でした。2013年の平均日数およびEditor rejectの割合は、45.2日および40.3%、2014年のそれは51.2日および30.3%でした。このようにEditor rejectとなった論文は増加してしまいましたが、審査時間は短縮しました。審査時間が短くなった理由としては様々なことが考えられます。しかし、査読依頼を快くお引き受けいただいたことと、査読審査の結果を迅速にご報告いただいたことが、その大きな原因であることは間違いありません。皆さまのご協力に感謝いたします。

特集と総説

第57巻(2015年)には、2つの特集

「Unravelling ecological networks: complexity-stability relations and diversity of interaction types」(編集: 難波利幸さん)と「Reproductive interference: ecological and evolutionary consequences of interspecific promiscuity」(編集: 京極大助さん)が出版されました。また、奨励賞受賞者の仲澤剛史さんと高橋佑磨さんの2つの総説が掲載されました。第58巻(2016年)では、特集「Bayesian, Fisherian, error, and evidential statistical approaches for population ecology」(編集: 徳永幸彦さん)が出版されました。第59巻(2017年)以降も、特集や総説の掲載を継続していく予定です。

特集の提案は随時受け付けており、その要綱は以下のサイトからダウンロードできます(Special Features: For Organizers): <http://www.springer.com/life+sciences/ecology/journal/10144> ふるってご提案ください。

編集長・佐藤一憲

表 1. Population Ecology 編集報告 (2016 年 6 月 21 日現在)

投稿 (2015 年分)

	国内	国外	合計
受理	8	29	37
棄却	5	81	86
未決	0	0	0
取り下げ	0	0	0
合計	13	110	123
受理率	61.5%	26.4%	30.1%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	30	0	7	37
棄却	86	0	0	86
未決	0	0	0	0
取り下げ	0	0	0	0
合計	116	0	7	123
受理率	25.9%		100.0%	30.1%

投稿 (2016 年分)

	国内	国外	合計
受理	1	0	1
棄却	3	32	35
未決	1	22	23
取り下げ	0	0	0
合計	5	54	59
受理率	25.0%	0.0%	2.8%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	1	0	0	1
棄却	35	0	0	35
未決	22	1	0	23
取り下げ	0	0	0	0
合計	58	1	0	59
受理率	2.8%			2.8%

インパクトファクター

2006	2007	2008	2009	2010
1.534	1.314	1.895	1.539	1.846
2011	2012	2013	2014	2015
2.287	1.923	1.7	1.57	1.698

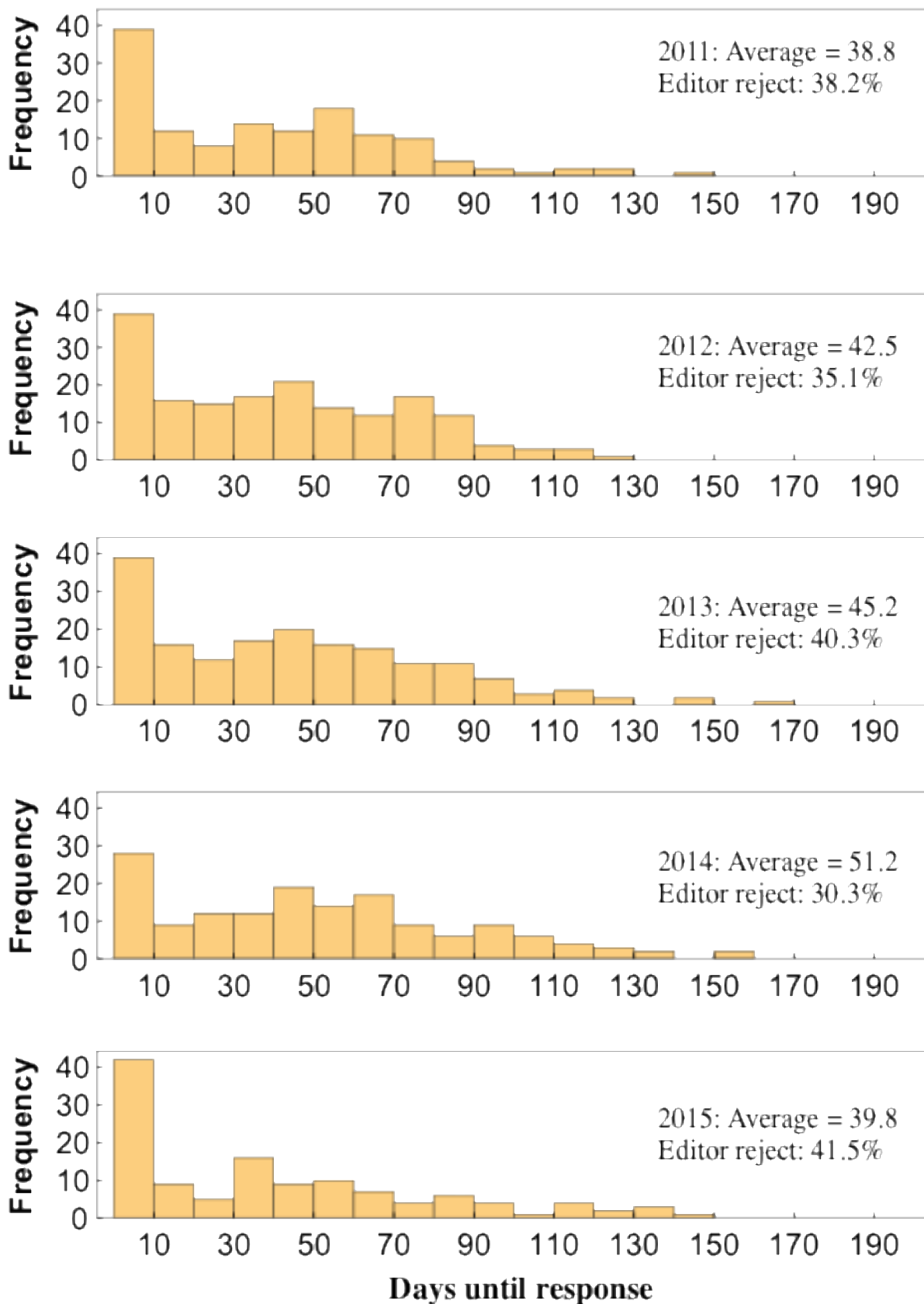


図1. 1回目の審査終了までの日数ごとの論文数(2011年から2015年). "Editor reject"は審査に回らず編集長, 副編集長, 担当編集委員の段階で棄却された原稿の割合を示す.

会員異動

個人情報保護法に鑑み、個体群生態学会会報のWeb版では会員の異動情報を公開しておりません。

会員情報変更の際の連絡のお願い

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更があった場合には、個体群生態学会の Web サイトの「会員手続」を通じて必ずご連絡ください。

編集後記

昨年度の滋賀県立大学(彦根)での年次大会は、湖・川・山とお城に囲まれた自然豊かなキャンパスで開催されました。個体群生態学の未来についての提言と、英語も取り混ぜた熱い議論の展開に、大いに触発された参加者も多かったことと思います。変わって今年度は、北海道の定山溪温泉での久しぶりの合宿シンポです。

Evolutionary Demography Societyのメンバーによる基調シンポにも期待が高まります。基本は合宿ですが、通いも可能ですので、奮ってご参加ください。

英文誌PEは、佐藤編集長らの手腕によりインパクト係数(IF)が上昇しました。編集長の提案で論文賞も新設される運びとなりました。日本からの投稿数が全投稿数の1割と減少中のため、論文賞を狙いたい、研究成果を早め(初回審査は平均40日)に出版したい、PEのIF上昇に貢献したい、という方は、今が投稿のチャンスです。

研究室紹介は九大の2研究室に依頼しました。

オープンキャンパスや期末試験作成・採点の多忙な時期の執筆ありがとうございました。同じ大学とはいえ、移転の最中のため、新(伊都)・旧(箱崎)キャンパスに分かれてしまい、もう2年は不便な状態が続きます。紹介文では、それぞれのキャンパスへの思いも語られ、来年度の大会が開催される伊都の様子も垣間見ることができます。

8月にお手元に届くこの白表紙ですが、岸田理事らの計らいで、バックナンバーを2008年分まで学会ウェブサイトでも閲覧できるようになりました。さらに椿会長のご提案により、それ以前の会報についても可能な限り遡って掲載する予定です。

最後になりましたが、猛暑の折、特に野外実習・調査中の方は、どうぞ体調にお気を付けください。

個体群生態学会会報編集長

津田 みどり

(九大院・農・生防研)